

令和6年度 国語科 研究のまとめ

中西 果織・吉岡 大泰・岡本 恵里香

1 国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力について

(1) 国語科が考える「教師の資質能力」の具体

教師の資質能力として大切な力の一つに、教材研究の力がある。国語科の教材研究とは、子どもにつけたい「言葉の力」の決定と教材分析の2点だと考える。つけたい「言葉の力」を明確にし、目指す子どもの姿や目標設定をはっきりとさせた上でどのような教材を扱うのか、そしてその教材をどのように分析するのが重要である。特に、教材分析は国語科教師にとって重要な能力だと考える。その教材を作品の特徴や文章構成で精密に分析し、子どもの側からどのような問いや反応が出るのかを多様に想定することで「何を教えるのか」「どのように学ぶのか」を具体化することを重視したい。

資質能力	国語科が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・つけたい「言葉の力」を明確にし、学習者が主体的に学習課題を設定することを教員の立場から適切に支援すること。 ・一単元 単元間 一年間 6年間 3年間 9年間の学びを見通し、単元におけるつけたい「言葉の力」を焦点化すること。 ・つけたい「言葉の力」に適した教材を見出し、作品が作られた背景や作品のもつテーマ、文章表現の特徴など、教材のもつ特性を的確に把握すること。 ・学習者の発達段階を考慮しながら他者と関わり自分と向き合う単元を学習者とともに創造すること。
授業実践力	・児童の主体性を引き出す発問や手立てにより学習者の気づきや問いを発展的、有機的につなげていくこと。 ・豊かな言葉が行き交う学びを支える対話の場を作ること。
授業分析・評価力	・学習者の発言や自己表現したものから学習者の変容を見取り、授業にいかす力。 ・学習者の変容を見取るための適切な方法を定め、学習の記録を児童・生徒と共有して次の学習に活かす力。

(2) 国語科の特性に応じた見取りの方法について

授業前に子どもが抱いた「一次感想」と授業後の「二次感想」を用いて、子ども自身が前の自分と今の自分を比べることによって自分をメタ化し、自己の変容を自覚できるようにしたい。そのために、教師が学習者をどう捉えて、どう評価していくのかを明確にもち、学習者が自らの変容を自覚できるようにしたい。さらに、前単元で自覚した自分の変容を次単元へとつなげることで学びの構造化をはかり、1年間の学びや9年間のカリキュラムの中で自分と向き合い、文学体験を通してよりよい生き方について自分の思いをもつことができるようにしたい。

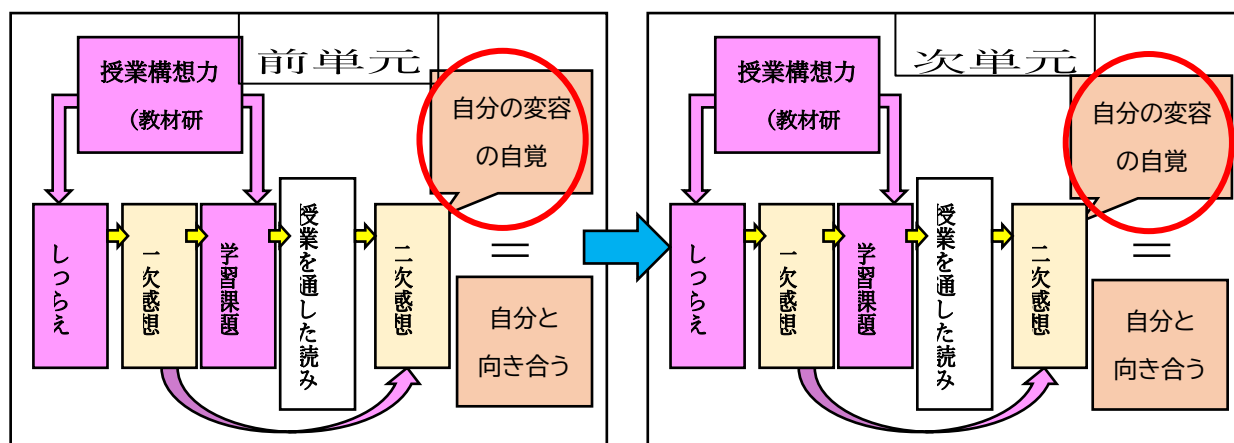


図1 自分と向き合う授業構想図

(3) 授業公開で見取った児童・生徒の姿の例

資質能力	児童・生徒の姿	手立て
授業構想力	自分が学びやすいものを選んだり，自分が興味のある問いを選んだりして学ぶといった自己調整を行っていた。	・ 小学校ではロイロノートの思考ツールを複数示し選択できるようにした。 ・ 中学校では Google スプレッドシートの共同編集で個人の問いを全体共有し，問いを選んで解答することを課題に設定した。
授業実践力	自分と異なる他者の意見も受容的に聞き，さらに自分の意見をより良いものにしてしようとしている。	・ 学習者の考えを基にした，教師のファシリテートによる内容の構造化や発問による整理を即時に行った。
授業分析・評価力	付け加えて発表したり，ワークシートやタブレットへ多く記入したりと自己の考えを活発に表出していた。また，学んだことを，他の学習の際にも活用した。	・ 対立する意見が出た際に受容的なフィードバックを行ったり，考えを共有したりした。意見の根拠になる本文の箇所や無意識にある個人の体験などを示すことを促す。

2 研究の成果と課題

成果	○これまでの授業実践を積み重ね，「文学の読み」の授業においてどのような言葉の力をつけていくのかの具体を示すことができた。また，自分と向き合い豊かに言葉を紡ぎ出す「文学の読み」の授業づくりのための，授業構想力，授業実践力，授業分析・評価力の基準を示すことができた。
課題	●評価には，学習の評価（総括的評価），学習のための評価（形成的評価），学習としての評価（学習者が主体となつて行う自己評価）がある。また，評価は基本的に「児童生徒の学習改善につながるもの」と「教師の指導改善につながるもの」の2つの性質があるが，後者の学習者の変容を

	適切に見取り，学習者と共に学習評価を共有していく教師の「評価基準，評価方法」の具体の整理が不十分であった。評価の「目的・主体・対象・方法」を明確にし，学習者の変容を見取るための適切な方法について，授業実践を通して具体化していきたい。
--	---